

アーバントリップ委員会

子どもたちを支え、守った建築

第78回 JIA アーバントリップ
「建築家シリーズ vol.6 建築家・阪田誠造」



建築ジャーナル
編集部

雨宮 明日香

幸せな建築体験をした。

阪田誠造氏には、建築家会館の本『建築家の誠実』の前半部分のインタビューで、数日に渡り建築に対する静かだが確固たる熱い姿勢を聞いた。その中でも、一度は見ておきたいと願ったサレジオ学園に運良く見学に行く機会を得た。



サレジオ学園について語る阪田氏

第78回 JIA アーバントリップ「建築家シリーズ vol.6 建築家・阪田誠造」は、学園長の「ここは子どもたちを支え、守った建物である」という印象的な言葉で始まった。続いて、予定にはなかった阪田氏の前段としての言葉。「もともとは戦争で焼け出された孤児のために考えられた場所です。子どもたちの根城として、豊かな空間にしたかった。それを踏まえた上で見ていただきたい。」現在は、事情があり家族と暮らせない2才から18才までの男子がここで学び、暮らす。

続いてがアーバントリップの肝である。当時の担当者だった坂倉建築研究所の大倉久明氏の案内で園内を見て回る。参加者の多くは建築関係者であるが、方々から感嘆の声が上がり、大倉氏への質問もやまない。

見学の後は、坂倉建築研究所の萬代恭博氏を司会に阪田氏と大倉氏の対談。設計時から25年以上が経過しているが、つい先日のことのように明確に語られる設計方針。また、阪田氏からは竣工時から変わった動線にするどい指



東京サレジオ学園。台地が軒線に接する

摘も出て、ブレのなさの一つひとつの設計に対し真摯に向き合ってきたことを感じさせる。

建築の素晴らしさは言わずもがなだが、優れているのは敷地の読み取りの確かさだ。デザインされているのは建築物だけではない。中庭はわずかに土盛りされ、園舎の傾斜した長い軒線に接して見える。『建築家の誠実』の中でも繰り返し語られたのが「敷地を読む」ということであり、阪田氏は敷地に何度も足を運びスケッチをする。敷地や、場所に対し類まれな感度を持っていることが建築家・阪田誠造の魅力なのではないか。

昨年には、JIA25年賞を受賞。蔦のからむ鐘楼、大きく枝を伸ばす木々、この建築の魅力は時を経て増していく。



左から萬代氏、阪田氏、大倉氏